

白手袋（しろてぶくろ）は短く略して白手（しろて）とも呼んでいます。

直接素手で作品を取扱くと、汚れや手跡が残ることや、サビなどの原因になることがあります。そのような可能性が懸念される場合には、白い綿手袋を付けて作品を取扱います。手袋を着けることで手が滑りやすくなったり、手袋の繊維が作品に引っかかったりして逆に作品を傷めてしまう危険がある場合や、指先の微妙な感覚が必要とされる作業には白手袋は使いませんが、他の美術館などからお借りした作品を取扱う場合は、所蔵先と相談して作業時に白手袋を着用するかしないかを決めています。



↑ライオネル・ファイニンガー展（2008年10月17日?12月23日）展示より

一方の黄袋（きぶくろ）とは、素描や版画作品を箱に入れて収納する場合に使う袋。その大半が黄色の布で出来ています。



↑黄袋は作品より少し大きめ。口の部分を折り返して箱に入れます。

黄色の理由は、昔から黄色の染料として使われていたウコンに防虫効果があったからとも言われています。黄袋に使用されている黄色染料の種類やその防虫効果については不明ですが、額縁や額縁に装着されているガラスやアクリルの傷を防ぐことができ、振動や温湿度の変化を緩和する効果もあります。



↑いろいろな黄色、いろいろな大きさの黄袋があります。色はともかく、大きさは作品（額の寸法）にあわせて作られています。

白手袋も黄袋も作品に直接触れるもの。白手袋が黒手袋になる前に、黄袋が茶袋になる前に、洗濯して繰り返し使っています。（作品への影響に配慮し、洗濯には蛍光剤などの添加物が少ない洗剤を使用しています。）

そして、お洗濯にご協力をいただいているのは愛知県美術館友の会サポート部会の皆さん。お洗濯だけでなく、手袋の縫い目のホツレや黄袋の破れなど繕いまでして下さっています。いつもありがとうございます。

(M I)